

人類をどこに連れてゆくのか？

— AIの進化、文学研究の現場から —

白百合女子大学教授 井上 隆史

社会時評

人工知能(AI)の急速な進化には目を覚ませるものがある。話題の「チャットGPT」は、どんな質問に対しても、即座に、しかもあたかも人間であるかのように受け答える。しばしばその内容は不正確で、それにもかかわらず自信たっぷりに答えるので、使う側としてはたまされぬように注意しなければならないが、逆にこちらから具体的な情報を添えて適切な指示を与えれば、AIは疲れを知らない優秀なアシスタントとして24時間働き続ける。

私の研究領域は日本文学だが、必要に迫られて短時間で外国文献を読まなければならぬことがある。そんな時、AIに文献を読ませ(アップロードし)、重要箇所を抜き出させる。それが私の理解と異なる場合は、「なぜお前はそう考えたのか」と尋ねてみる。これは、他者との対話を通じて理解を深めアイデアを出し合うブレインストーミングと呼ばれる方法を、いつでも思い付いた時に私一人で行うようなもので、実に便利である。

さて、ここまでではかつて文房具や電卓、ワープロがそうであったように、AIについても私たちの脳を補助する道具として理解できるかもしれない。では、次の例はどうだろうか。文学作品の中には完成に至らず作者の死によって中断したり、実際に発表された作品とは異なるストーリーが記された下書き原稿や創作メモの残っている小説がある。夏目漱石「明暗」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、三島由紀夫「豊饒の海」などがそうである。

注目すべきは、私はまだ研究課題として実践していないが、AIに原稿や関連資料を読ませ、分析結果に基づいて、書かれることになかった「続・明暗」や「新・銀河鉄道の夜」「新・豊饒の海」は、どこまでが漱石、賢治、三島の作品で、どこからがそうではないのか。また、こういう

研究を行った時、どこまでが私の研究で、どこからがAIの研究なのだろうか。考えたすと、頭がおかしくなりそう。

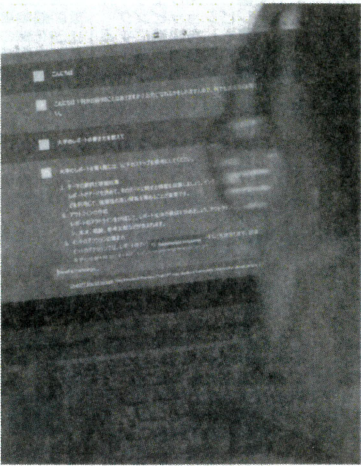
実は5000年以上昔に人類が文字を生み出した時、それは単に「脳の補助」として話はなく、どこまでが自分ではないかという問いが既に発生していたのかもしれない。AIの進化によって、私たちはこの問題に改めて向き合うことになった。問題は、技術革新の目のくらむような速さである。脳とAIを電氣的になく研究も進んでいる。このことを考えれば、いま進行しているのは、文字の発

明をはるかに上回る文明的な事象だと言わなければならない。

AIは人類をどこに連れてゆくのか。それは行く先の分からない旅なのだ。



三島由紀夫「豊饒の海」を読み直す。いづえ・たかし 1963年、横浜市生まれ。日本近代文学研究者。2021年「暴流の人」三島由紀夫で読売文学賞を受賞。他の著書に「もう一つの日本」を求めて



「チャットGPT」のパソコン画面